新世紀のキャンパス
Campus of New Century

東海大学高輪キャンパス 1号館 2号館

窓の外にボックスひさしが並ぶ新1号館。ブリッジを渡れば1階エントランス, 階段を下りれば地下の図書館へ通じる。

正門を入ってすぐの新2号館は, キャンパスのランドマーク。東海大学のロゴマークが浮かび, 吹き抜けの渡り廊下が印象深い。

都心の一等地という限られたスペースの中で，憩いのアメニティ空間を確保したテラス。（1号館）

東海大学は，全国に10のキャンパスをもち，21学部，3万人近い学生を擁するマンモス大学である。2008年に北海道東海大学，九州東海大学を東海大学へ統合。一貫教育委員会，高等教育機関改革検討委員会において，全国に分散したキャンパスで類似の教育を行う情報系学部・学科の再構築について議論を重ねてきた。そして統合と時を同じくして2008年に高輪校舎の短期大学部を募集停止し，情報通信学部を新たに設置した。これを機に，築40年を超す校舎の整備事業に着手し，2010年2月には新1号館を，2011年8月には新2号館を竣工した。

新1号館は地上6階，地下3階建てで，地下3階に汎用コンピュータールーム，地下2階に目玉ともいえる特殊実験室，地下1階に図書室，1階に事務室，2階に講義室，研究室，3～6階に研究室を備えた。新2号館は地上3階，地下1階建てで，地下1階～1階に492席の階段状の大講義室，2階にPC内蔵可能の講義室，3階に学生ホールや部室，屋上庭園を備える。1・2号館ともに，情報通信学部らしく，全館無線LAN，全室フリーアクセスフロアを採用した。

石田昌俊高輪教学課長は，「学部の設置にあたり，社会が求める情報技術者像はどういうものかを議論した。すでにオペレーターやプログラマーの人材ニーズはインド・中国へ移りつつあったので，まず“即戦力として産業界で活躍できる人材”であり，かつ“世界をリードし，上流工程をマネジメントできる人材”の養成を目指した」と語る。

これを実現する教育の特色として，産学連携型教育によるPBL（Project Based Learning）を実践してきた。例えば1年次の学科共通科目では，IT企業が集まる品川に近い立地メリットを生かし，企業の研究・開発者を講師に招き，開発現場の人材ニーズや技術動向について生の声を聞いている。2週間のインターンシップ科目では，ソフトウェア開発会社でシステム要件定義に沿って開発を行うなど，実践的な体験を得ることができたという。

世界が舞台となれば，英語コミュニケーション能力も不可欠となる。1・2年次には英語のジェネリックスキルを身につけ，3年次以降にプレゼンテーション演習やテクニカルドキュメンテーション演習で，学習・研究成果を英語のみで発表する訓練を行う。評価測定に，年3回のTOEIC® 団体受験を活用している。

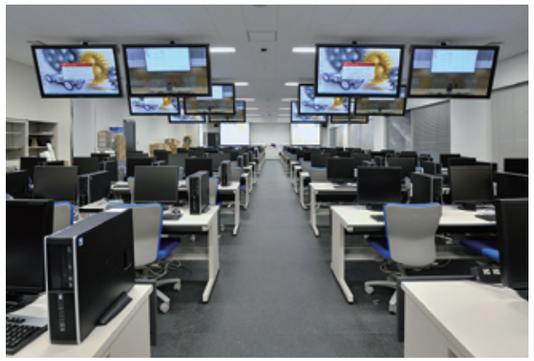
こうした教育の特色が実を結び，第1期生となる2012年3月卒業生のうち，8割を超える学生が就職を希望するなか，93.2％の就職率と好調だ。学生からは，アクセスの良さが，面接と授業の両立に役立ったとの声も多かったという。この4月には，専門職大学院組込み技術研究科を完全統合した情報通信学研究科も設置した。教育強化の次は研究へと，大学機能のさらなる充実化を図る。

（取材・文／本誌 能地泰代）

492席の階段状大講義室。1学年全員が対象の授業や新入生オリエンテーション，学園祭，学会など多目的に活用。（2号館）

アジア最大規模を誇るバーチャルリアリティ実験室。3Dメガネをかけてホロステージ内に入ると，3D空間が広がる。（1号館）

南側の斜面が1階に面し，地下とは思えない明るい学部図書室。開架式書棚，167席の閲覧スペース，DVD視聴ブースを備える。（1号館）



補助ディスプレーが圧巻の汎用コンピュータールーム。120台の教室が1室，60台の教室が2室ある。（1号館）

工業製品を開発する際に，人間がどういった反応を示すかを観察するユーザビリティラボ。脳波を測定し，マジックミラー越しに反応を観察する。（1号館）

学生ホール（手前）と自立型パーティションで区切った部室では，現在20団体が活動している。（2号館）

▶カレッジマネジメントTOPページへ戻る